

中国怪奇小説集

剪燈新話

岡本綺堂

青空文庫

第十二の夫人は語る。

「今晚は主人が出ましてお話をいたす筈でございましたが、よんどころない用事が出来まして、残念ながら俄かに欠席いたすことになりました。就きましては、お前が名代みようだいに出て何かのお話を申し上げるということでしたが、無学のわたくしが皆さま方の前へ出て何も申し上げるようなことはございません。唯ほんの申し訳ばかりに、どなたも御存じの『剪燈新話』のお話を少々申し上げて御免を蒙ります。

わたくしどもにはよく判りわかませんが、支那の小説は大体に於いて、唐とうと清しんとが一番よろしく、次が宋そうで、明朝みんの作は余り面白く

ないのだとか申すことでございます。殊に今晚の御趣意を承^{うけたま}わりました、主人もお話の選択によほど苦しんでいたようでございました。しかし支那の本国ではともかくも、日本では昔から『剪燈新話』がよく知られて居りまして、これは御承知の通り、明^{みん}の瞿^くそうきつ宗吉の作ということになって居ります。その作者に就いては多少の異論もあるようですが、ここでは普通一般の説にしたがって、やはり瞿宗吉の作といたして置きましょう。

今まで皆さんがお話しになったものとは違ひまして、この『剪燈新話』は一つのお話が比較的に長うございますから、今晚はそのうちの『申陽洞記』^{しんやうどうき}と『牡丹燈記』^{ぼたんとうき}の二種を選んで申し上げることにいたします。馬琴^{ばきん}の『八犬伝』のうちに、犬飼^{いぬかい}現八^{げんぱち}

が庚申山こうしんざんで山猫の妖怪を射る件くだりがありますが、それはこの『申陽洞記』をそつくり書き直したものでございます。一方の『牡丹燈記』が浅井了意あさいりよういの『お伽ぼうちとぎ』や、円朝えんちようの『牡丹燈籠』に取り入れられているのは、どなたも能く御存じのことでございます。前置きは先ずこのくらいにいたしまして、すぐに本ほんも文に取りかかります」

申陽洞記

隴西ろうせいの李徳逢りとくほうという男は当年二十五歳の青年で、馬に騎のりり、弓をひくことが上手で、大胆な勇者として知られていましたが、

こういう人物の癖として家業にはちつとも頓着せず、常に弓矢を取つて乗りまわっているの、土地の者には爪弾つまはじきされてしまった。

そういうわけで、身代しんだいもだんだんに衰えて来ましたので、元げん天曆てんれき年間、李は自分の郷里を立ち退のいて、桂州へ行きました。そこには自分の父の旧い友達が監郡の役を勤めているので、李はそれを頼つて行つたのですが、さて行き着いてみると、その人はもう死んでしまったというので、李も途方に暮れました。さりとて再び郷里へも帰られず、そこらをさまよい歩いた末に、この国には名ある山々が多いのを幸いに、その山々のあいだを往来して、自分が得意の弓矢をもつて鳥や獣けものを射るのを商売にしていました。

「自分の好きなことをして世を送っていれば、それで結構だ」

こう思つて、彼は平気で毎日かけ廻つていました。すると、ここに銭せんという大家たいけがありまして、その主人は銭翁と呼ばれ、この郡内では有名な資産家として知られていました。銭の家には今年十七のひとり娘がありまして、父の寵愛はひと通りでなく、子供のとときから屋敷の奥ふかく住まわせて、親戚や近所の者にも滅多めったにその姿を窺わせたことがないくらいでした。その最愛の娘が雨風の暗い夜に突然ゆくえ不明になつたので、さあ大変な騒ぎになりました。

よく調べてみると、門も扉も窓も元のままになつていて、外から何者かが忍び込んだらしい形跡もなく、娘だけがどこへか消え

てしまったのですから、実に不思議です。勿論、早速にその筋へ訴え出るやら、神に^{いの}禱るやら、四方八方をたずね廻らせるやら、手に手を尽くして詮議したのですが、遂にそのゆくえが判らないので、父の錢翁は昼夜悲嘆にくれた末に、こういうことを触れ出しました。

「もし娘のありかを尋ね出してくれた者には、わたしの身代の半分を割^さいてやる。又その上に娘の婿にする」

それを聞いて、誰も彼も色と慾とのふた筋から、一生懸命に心あたりを探し廻ったのですが、娘のゆくえは容易にわからず、むなしく三年の月日を送ってしまいました。すると、ある日のことです。かの李徳逢が例のごとくに弓矢をたずさえて山狩りに出る

と、一匹のくじかを見つけたので、すぐに追って行きました。

はよく走るの、なかなか追い付きません。鹿を追う猟師は山を見ずのたとえ譬の通りに、李は夢中になって追って行くうちに、岡を越え、峰を越えて、深い谷間へ入り込みましたが、遂に獲物えもののすがたを見失いました。がっかりして見まわすと、いつの間にか日が暮れています。おどろいて引返そうとすると、もと来た道がもう判りません。そこらを無暗に迷いあるいているうちに、夜はだんだんに暗くなって、やがて初更しよこう（午後七時―九時）に近い頃になつたらしいのです。むこうの山の頂きに何かの建物があるのを見つけて、ともかくもそこまで辿り着くと、そこらは人じんせ跡きの絶えたところで、いつの代に建てたか判らないような、頽くず

れかつた一字いちうの古い廟がありました。

「なんだか物凄い所だ」

大胆の青年もさすがに一種の恐れを感じましたが、今更どうすることも出来ないのです、しばらく軒下に休息して夜のあけるのを待つことにしていると、たちまちに道を払う警蹕けいひつの声が遠くきこえました。

「こんな山奥へ今ごろ威めしい行列を作つて何者が来るのか。鬼神か、盗賊か」

忍んで様子を窺うに如しかずと思つて、かれは廟の欄間らんまへ攀よじのぼり、梁はりのあいだに身をひそめていると、やがてその一行は門内へ進んで来ました。二つの紅い燈籠をさきに立てて、その頭かしら分ぶん

とみえる者は紅い冠あかかんむりをいただき、うす黄色の袍ほうを着て、神坐の前にある案つくえに拠よつて着坐すると、その従者とおぼしきもの十余人はおのおの武器を執とつて、階段きざはしの下に居列ぎようそびました。その行粧うはすこぶる厳肅であります、よく見ると、かれらの顔かたちはみな蒼黒く、猿のたぐいの※かくというものでありました。

さては妖怪変化へんげかと、李は腰に挟ひんでいる箭やを取つて、まずその頭分とみえる者に射あてると、彼はその臂ひじを傷つけられて、おどろき叫んで逃げ出しました。他の眷族けんぞくどもも狼狽して、皆ばらばらと逃げ去ってしまったので、あとは元のようにひっそりと鎮まりました。夜が明けてから神坐のあたりを調べると、なま血のあとが点々として正門の外までしたたっている、李はその

跡をたずねて、山を南に五里ほども分け入ると、そこに一つの大
きい穴があつて、血のあとはその穴の入口まで続いていました。

「化け物の巢窟はここだな。どうしてくりよう」

李は穴のあたりを見まわつて、かれらを退治する工夫を講じて
いるうちに、やわらかい草に足をすべらせて、あつという間に穴
の底へころげ落ちました。穴の深さは何十丈だか判りません。仰
いでも空は見えないくらいです。所詮しよせんふたたびこの世へは出ら
れないものと覚悟しながら、李は暗いなかを探りつつ進んでゆく
と、やがて明るいところへ出ました。そこには石室いしむろがあつて、
申陽之洞しんようのどうという傍ふだが立っています。その門を守るもの数人、い
ずれも昨夜の妖怪どもで、李のすがたを見てみな驚いたように訊き

きました。

「あなたは一体何者で、どうしてここへ来たのです」

李は腰をかがめて丁寧な敬礼しました。

「わたくしは城中に住んで、医者をしてゐる者でございますが、今日この山へ薬草を採りにまいりまして、思わず足をすべらせてこの穴へ転げ落ちたのでございます」

それを聞いて、かれらは俄かに喜びの色をみせました。

「おまえは医者というからは、人の療治が出来るのだろうか」

「勿論、それがわたくしの商売でございます」

「いや、有難い」と、かれらはいよいよ喜びました。「実はおれたちの主君の申陽侯が昨夜遊びに出て、ながれ矢のために負傷な

された。そこへ丁度、お前のような医者が迷つて来るというのは、
天の助けだ」

かれらは奥へかけ込んで報告すると、李はやがて奥へ案内されました。奥の寢室は帷も衾も華麗をきわめたもので、一匹の年ふ
る大猿が石の榻の上に横たわりながら唸うなっていると、そのそばに
は国色こくしよくともいうべき美女三人が控えています。李はその猿の
脈を取り、傷をあらためて、まことしやかにこう言いました。

「御心配なさるな。すぐに療治をしてあげます。わたくしは一種
の仙薬をたくわえて居りますから、それをお飲みになれば、こん
な傷はたちまちに癒るばかりでなく、幾千万年でも長生きが出来
るのです」

腰に着けているふくろ囊から一薬をとり出して勿もつ体たいらしく与え、他の妖怪どもも皆その前にひざまずいて頼みました。

「あなたは実に神のようなお人です。その長生きの仙薬というのをどうぞ我々にもお恵みください」

「よろしい。おまえらにも分けてあげよう」

李は囊にあらん限りの薬をかれらにも施すと、いずれも奪たい合あって飲みましたが、それは怖ろしい毒薬で、怪鳥や猛獸を仆たおすために矢鏃やじりに塗るものでありました。その毒薬を飲んだのですから堪まりません。かの大猿をはじめとして、他の妖怪どもも片端から枕をならべてばたばたと倒れてしまいました。仕済ましたりとかあざわらいながら、李は壁にかけてある宝剣をとって、大猿小猿

あわせて三十六匹の首をことごとく斬り落しました。

残る三人の美女も妖怪のたぐいであろうと疑つて、李はそれをも殺そうとすると、みな泣いて訴えました。

「わたくしどもは決して怪しい者ではございません。不幸にして妖怪に奪い去られ、悲しい怖ろしい地獄の底に沈んでいたのでございます。その妖怪を残らず亡ぼして下さいましたのですから、わたくしどもに取りましてあなたは命の親の大恩人でございます」

そこで、だんだん聞いてみると、その一人はかの銭翁の娘で、他のふたりもやはり近所の良家の娘たちと判りました。李はこうして妖怪を退治して、不幸の娘たちを救つたのですが、何分にも深い穴の底に落ちているのですから、三人を連れて出る術すべがあり

ません。これには李も思案にくれているところへ、いずこよりも知らず、幾人の老人があらわれて来ました。いずれも鬢びんの毛を長く垂れて、尖った口を持った人びとで、ひとりの白衣の老人を先に立てて、李の前にうやうやしく礼拝しました。

「われわれは虚星きよせいの精で、久しくここに住んで居りましたが、近ごろかの妖怪らのために多年の住み家を占領されてしまいました。しかも我々はそれに敵対するほどの力がないので、しばらくここを立ち退いて時節の来るのを待っていたのでございますが、今日あなたのお力によって、かれらがことごとく亡びましたので、こんな悦ばしいことはありません」

老人らはその謝礼として、めいめいの袖の下から、金や珠たまのた

ぐいを取り出して献ささげました。

「おまえらもすでに神通じんつうりき力を具そなえているらしいのに、なぜかの妖怪どもに今まで屈伏していたのだ」と、李は訊きました。

「わたくしはまだ五百年にしかありません」と、白衣の老人は答えました。「かの大猿はすでに八百年の劫こうを経て居ります。それで、残念ながら彼に敵することが出来なかつたのでございます。

しかし我々は人間に対して決して禍いをなすものではございません。かの兇惡な猿どもがたちまち滅亡したのは、あなたのお力とは申しながら、畢ひつきよう竟は天罰でございます」

「ここを申陽洞と名づけたのは、どういうわけだ」と、李はまた訊きました。

「猿は申しんに属します。それで、かれらが勝手にそんな名を付けたので、もとからの地名ではございません」

「おまえらがここへ帰り住むようになったらば、おれに出口を教えてくれ、礼物れいもつなどは貰うに及ばない。ただこの娘たちを救つて出られればいいのだ」

「それはたやすいことでございます。半時のあいだ眼を閉じておいでなされば、自然にお望みが遂げられます」

李はその通りにしていると、耳のはたには激しい雨風の声がしばらく聞えるようでしたが、やがてその声がやんだので眼を開くと、一匹の大きい白鼠がさきに立って、豚いのこのような五、六匹の鼠がそのあとに従っていました。そこには一つの穴が掘られていて、

それから明るい路へ出られるようになってゐるので、李は三人の娘と共に再びこの世の風に吹かれることになりました。

それからすぐに銭翁の家をたずねて、かのむすめを引き渡すと、翁はおどろき喜んで、かねて触れ出した通りに李を婿にしました。他の二人の娘の家でも、おなじくその娘を贈ることにしたので、李は一度に三人の美女を娶めとつた上に、あつぱれのだいふくちようじゃ大福長者になりました。その後ふたびかの場所へ行つてみると、そこらには草木が一面におい茂よすがつてゐるばかりで、むかしの跡をたずねる便宜よすがもありませんでした。

牡丹燈記

元げんの末には天下大いに乱れて、一時は群雄割拠の時代を現じま
 したが、そのうちで方谷ほうこく孫そんというのは浙東せつとうの地方を占領して
 いました。そうして、毎年正月十五日から五日のあいだは、明州
 府の城内に元宵げんしょうの燈籠をかけつらねて、諸人に見物を許すこ
 とにしていたので、その宵よい々の賑わいはひと通りではありません
 でした。

元しせいの至正二十年の正月のことでございます。鎮明嶺ちんめいれいの下もとに住
 んでいる喬生きょうせいという男は、年がまだ若いのに先頃その妻をう
 になつて、男やもめの心さびしく、この元宵げんしょうの夜にも燈籠見物に
 出る気もなく、わが家の門かどにたたずんで、むなしく往来の人びと

を見送っているばかりでした。十五日の夜も三更さんこう（午後十一時—午前一時）を過ぎて、往来の人影も次第に稀になった頃、髪を両輪りょうわに結んだ召仕い風の小女が双頭の牡丹燈をかかげて先に立ち、ひとりの女を案内して来ました。女は年のころ十七、八で、翠あおい袖、紅あかい裙もすその衣を着て、いかにもしなやかな姿で西をさして徐しずかに行き過ぎました。

喬生は月のひかりで窺うと、女はまことに国色こくしよくともいうべき美人であるので、我にもあらず浮かれ出して、そのあとを追ってゆくと、女もやがてそれを覺さとつたらしく、振り返ってほほえみました。

「別にお約束をしたわけでもないのに、ここでお目にかかるとは

……。何かのご縁でございましたね」

それをしおに、喬生は走り寄つて丁寧^{ていねい}に敬礼しました。

「わたくしの住居はすぐそこです。ちよつとお立ち寄り下さいませまいか」

女は別に拒む色もなく、かの小女をよび返して、喬生の家へ戻つて来ました。初対面ながら甚だ打ち解けて、女は自分の身の上を明かしました。

「わたくしの姓は符、字は麗卿、名は淑芳と申しました。

かつて奉化州の判を勤めて居りました者の娘でございますが、父は先年この世を去りまして、家も次第に衰え、ほかに兄弟もなく、親戚もすくないので、この金蓮とただふたりで月湖の西に仮住

居をいたして居ります」

今夜は泊まつてゆけと勧めると、女はそれをも拒まないで、遂にその一夜を喬生の家に明かすことになりました。それらの事は委くわしく申し上げません。原文には「甚だ歡愛を極きわむ」と書いてございます。夜のあける頃、女はいったん別れて去りましたが、日が暮れるとまた来ました。金蓮きんれんという召仕いの小女がいつも牡丹燈をかかげて案内して来るのでございます。

こういうことが半月ほども続くうちに、喬生のとなりに住む老人が少しく疑いを起しまして、境いの壁に小さい穴をあけてそつと覗いてみると、紅べにや白粉おしろいを塗つた一つの骸骨が喬生と並んで、もとともしびの下に睦まじそうにささやいているのです。それをみて

老人はびっくりして、翌朝すぐに喬生を詮議すると、喬生も最初
は堅く秘して言わなかったのですが、老人に嚇おどされてさすがに薄
気味悪くなったと見えて、いっさいの秘密を残らず白状に及びま
した。

「それでは念のために調べて見なさい」と、老人は注意しました。
「あの女たちが月湖の西に住んでいるというならば、そこへ行つ
てみれば正体がわかるだろう」

なるほどそうだと思つて、喬生は早速に月湖の西へたずねて行
つて、長い堤とての上、高い橋のあたりを隈なく探し歩きましたが、
それらしい住み家は見当りません。土地の者にも訊き、往来の人
にも尋ねましたが、誰も知らないという。そのうちに日も暮れか

かつて来たので、そこにある湖心寺こしんじという古寺にはいつて暫く休むことにしました。そうして、東の廊下をあるき、さらに西の廊下をさまよっていると、その西廊のはずれに薄暗い室へやがあつて、そこに一つの旅櫬りよしんが置いてありました。旅先で死んだ人を棺おさに蔵めたままで、どこかの寺中にあずけて置いて、ある時機を待つて故郷へ持ち帰つて、初めて本当の葬式をするのでございます。したがつて、この旅櫬に就いては昔からいろいろの怪談が伝えられています。

喬生は何ごころなくその旅櫬をみると、その上に白い紙が貼つてあつて「故奉化符州判女もとのほうかふしゅうはんのじよ、麗卿れいけい之の柩ひつぎ」としるし、その柩の前には見おぼえのある双頭の牡丹燈をかけ、又その燈下に

は人形の侍女こしもとが立っていて、人形の背中には金蓮の二字が書いてありました。それを見ると、喬生は俄かにぞつとして、あわててそこを逃げ出して、あとをも見ずに我が家へ帰つて来ましたが、今夜もまた来るかと思うと、とても落ちついてはいられないので、その夜は隣りの老人の家へ泊めてもらつて、顫ふるえながらに一夜をあかしました。

「ただ怖れていても仕方がない」と、老人はまた教えました。
「玄妙げんみょうかん観ぎほうしの魏法師もとは故の開府の王真人おうしんじんのお弟子で、おまじないでは当今第一ということであるから、お前も早く行つて頼むがよかろう」

その明くる朝、喬生はすぐに玄妙観へたずねてゆくと、法師は

その顔をひと目みて驚いた様子でした。

「おまえの顔には妖氣が満ちている。一体ここへ何しに來たのだ」
喬生はその坐下に拝して、かの牡丹燈の一条を訴えると、法師は二枚の朱いお符あかふだをくれて、その一枚は門かどに貼れ、他の一枚は寢台に貼れ。そうして、今後ふたび湖心寺のあたりへ近寄るなど、言い聞かせました。

家へ歸つて、その通りにお符を貼つて置くと、果たしてその後、牡丹燈のかげも見えなくなりました。それからひと月あまりの後、喬生は衰こんしゆうきよう繡橋のほとりに住む友達の家をたずねて、そこで酒を飲んで歸る途中、酔つたまぎれに魏法師の戒めを忘れて、湖心寺のまえを通りかかると、寺の門前にはかの金蓮が立ってい

ました。

「お嬢さまが久しく待つておいでになります。あなたもずいぶん薄情なかたでございますね」

否いやおう応いわずに彼を寺中へ引き入れて、西廊の薄暗い一室へ

連れ込むと、そこには麗卿が待ち受けていて、これも男の無情を責めました。

「あなたとわたくしは素もとからの知合いというのではなく、途中でふと行き逢ったばかりですが、あなたの厚い心に感じて、遂にわたくしの身を許して、毎晩かかさずに通いつめ、出来るかぎりの真実を竭つくして居りましたのに、あなたは怪しい偽えせ道士どうしのいうことを真まに受けて、にわかにわたくしを疑つて、これぎりに縁を切

ろうとなさるとは、余りに薄情ななされかたで、わたくしは深くあなたを怨んで居ります。こうして再びお目にかかったからは、あなたをこのままに帰すことはありません」

女は男の手を握って、ひつぎ 柩の前へゆくかと思うと、ふた 柩の蓋はおのずと開いて、二人のすがたはたちまち隠れました。蓋は元のおのりに閉じられて、喬生は柩のなかで死んでしまったのです。

となりの老人は喬生の帰らないのを怪しんで、おちこち 遠近をたずね廻った末に、もしやと思つて湖心寺へ来てみると、見おぼえのある喬生の着物の裾がかの柩の外に少しくあらわれているので、いよいよ驚いてその次第を寺の僧に訴え、早速にかの柩をあけてあらためると、喬生は女の亡骸なきがらと折り重なつて死んでいました。

女の顔はさながら生けるが如くに見えるのです。寺の僧は嘆息して言いました。

「これは奉化州判の符という人の娘です。十七歳のときに死んだので、仮りにその遺骸をここに預けたままで、一家は北の方へ赴きました。その後なんのたよりもありません。それが十二年後のこんにちに至って、そんな不思議を見せようとは、まことに思ひも寄らないことでした」

なにしろそのままにしては置かれないうので、男と女の死骸を蔵めた^{おさ}まままで、その柩を寺の西門の外に埋めました。ところが、その後^{くも}にまた一つの怪異が生じたのでございます。

陰った日や暗い夜に、かの喬生と麗卿とが手をひかれ、一人の

小女が牡丹燈をかかげて先に立つてゆくのをしばしば見ることがありまして、それに出逢ったものは重い病氣にかかつて、悪寒さむけがする、熱が出るという始末。かれらの墓にむかつて法事を営み、肉と酒とを供えて祭ればよし、さもなければ命を亡うしなうことにもなるので、土地の人びとは大いに懼おそれ、争つてかの玄妙觀へかけて、なんとかそれを取り鎮めてくれるように嘆願すると、魏法師は言いました。

「わたしのまじないは未然に防ぐにとどまる。もうこうなつては、わたしの力の及ぶ限りでない。聞くとところによると、四明山しめいざんの頂上に鉄冠てつかんどうじん道人という人があつて、鬼神を鎮める法術を能よくするといふから、それを尋ねて頼んでみるがよからうと思う」

そこで、大勢は誘いあわせて四明山へ登ることになりました。
 藤葛^{ふじかずら}を攀^よじ、溪^{たに}を越えて、ようやく絶頂まで辿りつくと、果
 たしてそこに一つの草庵があつて、道人は几^{つくえ}に寄り、童子は鶴に
 たわむれていました。大勢は庵の前に拝して、その願意を申し述
 べると、道人はかしらをふつて、わたしは山林の隠士で、翌^{あす}をも
 知れない老人である。そんな怪異を鎮めるような奇術を知ろう筈
 はない。おまえ方は何かの聞き違いで、わたしを買いかぶってい
 るのであろうと言つて、堅く断りました。いや、聞き違いでは
 ない、玄妙觀の魏法師の指図であると答えると、道人はさてはと
 うなずきました。

「わたしはもう六十年も山を下ったことがないのに、あいつが飛

んだおしやべりをしたので、又うき世へ引き出されるのか」

彼は童子を連れて下山して来ましたが、老人に似合わぬ足の軽さで、直ちに湖心寺の西門外にゆき着いて、そこに方丈ほうじょうの壇をむすび、何かのお符を書いてそれを焚やくと、たちまちに符の使い五、六人、いずれも身のたけ一丈余にして、黄巾こうきんをいただき、金甲きんこうを着け、彫り物のある戈ほこをたずさえ、壇の下に突つ立つて師の命令を待っていると、道人はおごそかに言い渡しました。

「この頃ここに妖邪の祟りがあるのを、おまえ達も知らぬことはあるまい。早くここへ駆り出して来い」

かれらは承わつて立ち去りましたが、やがて喬生と麗卿と金蓮の三人に手枷首枷てかせくびかせをかけて引つ立てて来て、さらに道人の指図

にしたがい、鞭むちや笞しもとでさんざんに打ちつづけたので、三人は惣身に血をながして苦しみ叫びました。

その呵責かしやくが終った後に、道人は三人に筆と紙とをあたえて、服罪の口供こうきようを書かせ、さらに大きな筆をとってみずからその判決文を書きました。

その文章は長いので、ここに略しますが、要するにかれら三人は世を惑わし、民を誣しい、条にたがい、法を犯した罪によつて、かの牡丹燈を焚き捨てて、かれらを九泉の獄屋へ送るというのでありました。

急々きゆうきゆう 如律令きゆうにによりつりよう

(悪魔払いの呪文)、もう寸刻の容赦

はありません。この判決をうけた三人は、今さら嘆き悲しみが

ら、進まぬ足を追い立てられて、泣く泣くも地獄へ送られて行きました。それを見送って、道人はすぐに山へ帰ってしまいました。

あくる日、大勢がその礼を述べるために再び登山すると、ただ草庵が残っているばかりで、道人の姿はもう見えませんでした。さらに玄妙觀をたずねて、そのゆくえを問いただそうとすると、魏法師はいつか啞になって、口をきくことが出来なくなっていました。

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社

1994（平成6）年4月20日第1刷発行

※校正には、1999（平成11）年11月5日3刷を使用しました。

入力：tatsuki

校正：小林繁雄

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

中国怪奇小説集

剪燈新話

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>